様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 8 日現在

機関番号：53801
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2008～2010
課題番号：20720161
研究課題名（和文）　英語の多読が初級英語学習者の語彙サイズに与える影響について

研究課題名（英文）　Influences of English extensive reading on vocabulary size of lower level learners of English

研究代表者
種村俊介（TANEMURA SHUNSYKE）
沼津工業高等専門学校・教養科・講師
研究者番号：70435428

研究成果の概要（和文）：多読が日本人初級英語学習者の語彙サイズに与える影響を明らかにすることを目的として、高専生を被験者に授業内で多読を実施し、被験者の語彙サイズの伸びを調査した。さらに、多読の際の辞書の使用が学習者の語彙サイズの伸びに与える影響について検証した。加えて、学習者の英語読解不安の軽減への多読の貢献の程度と多読初期段階の学習者の情意要因が多読に及ぼす影響が調査された。

研究成果の概要（英文）：The study investigated the influences of extensive English reading on the vocabulary size of Japanese lower level learners of English. The learners' vocabulary improvements with the use of a dictionary after reading were also examined. In addition to the studies of vocabulary improvement through extensive reading, contributions to the reduction of English reading anxiety levels of Japanese lower level learners of English were also measured. These affective factors of learners in the early stages of extensive reading were researched.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：外国語教育
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：付随的語彙学習、多読、語彙サイズ

１．研究開始当初の背景

Krashen (1985)のインプット仮説が発表されて以来、英語による多読活動は学校教育現場において広く実践され、その成果も多く発表されていた。Renandaya (2000)の分析によると多読に関するホームページに集められた 200 編の論文のうち、その 75%にあたる 151 編が 1990 年～2000 年までの間に書かれており、このことからも多読に対する関心が高まっていることが窺えた。さらに、日本では、一般の英語学習者の間でも英語の多読が注目され、社会人を含む幅広い年齢層の英語学習者を対象にした多読関連図書も多く出版されている状況であった（金谷 2005, 酒井 2002, 古川・神田他 2005)。

しかしながら、日本人を対象にした英語による多読に関する実証的研究はそれほど多くなく（門田・野呂, 2001)、中でも、日本の英

語初級学習者である中・高校生を対象にした主な研究と言えば、金谷他(1991, 1992, 1994, 1995)や鈴木(1996)、橋本(1997)などで、金谷他(1991, 1992, 1994, 1995)は多読が読解力、学習方法、動機付けへ与える影響と長期的な効果を、鈴木(1996)は多読がリスニング力や速読力を伸長させたことを、橋本(1997)は1年間の実践から読破ページ数と読解力との強い相関関係を報告しているが、多読活動が、語彙力に及ぼす影響について調査した研究は見当たらなかった。

日本人の中・高校生以外を被調査者にした多読と語彙との関係を研究においてもそれは同じであり、Horst, Cobb & Meara (1998)、や Nation & Deweerdt (2001)、Tekmen & Dalouglu (2006)では、多読が英語の付随的学習を促進することは明らかにされていたが、多読によりどれだけの語彙が習得されるのかを扱った研究は皆無であった。

２．研究の目的

本研究は、大きく下記の3つに大別される。

(1)授業内で英語の多読を実施し、教科書による意図的語彙学習と多読による付随的語彙学習が、学習者の受容語彙サイズにどのような影響を与えるのかを調査すること

(2) 多読時中の未知語への対応として辞書を使用することが、学習者の語彙サイズの増加にプラスの影響を与えるかを検証すること

(3) 多読が情意要因へ与える影響((3)-1 多読が学習者の読解不安の軽減へどの程度貢献するか)と情意要因が多読に与える影響((3)-2 学習者のどのような情意要因が多読の読書量にプラスの影響を及ぼすのか)を調査すること

３．研究の方法

(1) 高専 1 年生(41 名)を被験者に、約 7 ヶ月間、高校生用の検定教科書を主教材として使用した英語の授業内において、10～15 分間の多読活動を週 1・2 回実施した。被験者には、多読量を示すデータとして、その間に読破した多読図書の総語数を記録させた。さらに受容語彙サイズの変化を測定するため、多読開始時と終了時に英語語彙サイズテスト(望月,1998)をそれぞれ実施した。

(2) 高専 1・3・4 年生 203 名を対象に、1 年間を通して、授業内に 15 分間の多読を実施し、学習者の語彙サイズに多読が及ぼす影響を調査した。多読中の未知語への対応について、「どうしても意味が知りたい語に出会ったら記録しておき、読後に辞書で意味を確認する」ように指導した学習者群と「未知語は気にせず読み飛ばす」ように指導した学習者群を設け、語彙サイズの伸びに違いがでるか検証した。さらに、辞書の使用が学習者の多読の楽しさや英語力向上の実感に影響を与えるか質問紙を用いて調査した。

(3)-1 高専 1 年生(41 名)を被験者に、多読開始時の英語読解不安を調査するために Saito et al. (1999)による Foreign Language Reading Anxiety Scale(以下 FLRAS)を、英語読解力を測定するために Basic Assessment of Communicative English (以下 BACE)を実施した。その結果を基に、被験者を(a)読解不安が高く、読解力が高い学習者群、(b)読解不安が低く、読解力が高い学習者群、(c)読解不安が低く、読解力が低い学習者群、(d)読解不安が高く、読解力が低い学習者群に分類した。多読終了時に再び FLRAS を実施し、多読により英語読解不安がどの程度軽減されたのかを全体的な傾向と(a)～(d)の個人差の観点からの両方から調査した。

(3)-2 多読初期段階の授業内多読を 1 年間にわたって経験した高専生 241 名(高専 1 年生 1 クラス 41 名、3 年生 1 クラス 42 名、4 年生 4 クラス 158 名)を被調査者に、どのような情意要因が多読の読書量にプラスの影響を及ぼすか調査した。多読の促進要因を調査するために、多読を促進すると考えられる 26 の情意要因についての項目群で構成される質問紙を作成した。質問項目は、松井(2009)や Fujita and Noro(2009)で使用されたものと著者自身が作成したものを合わせた 56 項目から、類似した項目を削除する等して、調査対象者数を踏まえ、26 項目に絞った。質問紙調査は、多読終盤時期の授業時間内に実施された。

４．研究成果

(1)被験者は、受容語彙サイズが約 400 語増加したことが確認された。この受容語彙サイズの増加は、2006 年度に今回の被験者と同じ学年と学科の同じ英語科目の授業内で、検定教科書に加えて 1 年間に亘り英単語集を使用して継続的な意図的語彙学習を行った学習者の年間の受容語彙サイズの増加とほぼ同程度であった。このことから教科書による意図的語彙学習に多読による付随的語彙学習を組み合わせた学習法は、教科書と単語集による意図的語彙学習法と同程度の効果があることが示唆された。この結果は、僅かな時間を利用して行われ

た多読活動においても、付随的語彙学習が行われた可能性を示唆するものと言えよう。一方で、総読破語数と受容語彙サイズの増加語数の間には統計的に有意な相関関係が見られず、読書量の多さのみが、受容語彙サイズの増加に影響を与えたとは言い難いことも示唆された。加えて比較された 2006 年度の学習者に対して使用された教科書やシラバスなどは、本調査の被験者が使用したものと異なる等、様々な条件が異なるため、この結果は、あくまでも参考資料として判断されるべきであると言える。

(2) 語彙サイズが 1 年生は 252.95 語、3 年生は 381.36 語、4 年生は 332.98 語増加した。加えて、辞書使用が指導された群と指導されなかった群間では、語彙サイズの増加の違いについて統計的な有意差が確認されなかったが、辞書使用の指導が行われた群内において、実際に未知語を辞書で調べた学習者と調べなかった学習者間を比較・検証した結果、辞書を使用した学習者は使用しなかった学習者より、語彙サイズの伸びが統計的に有意に高いことが示された。さらに読書量の調査と多読に関する質問紙調査の結果から、辞書指導は、語彙力の向上の実感にプラスの影響を及ぼすが、読書量や多読の楽しさの実感、語彙力以外の英語力の向上の実感などはマイナスの影響を与えないことが示唆された。以上のことから、多読の際に気になる語を記録し読後に辞書で意味を調べることの教育的効果が示唆された。

(3)-1 学習者全体の読解不安に対する多読の効果が僅かながら窺え、「内容を理解できているかわからないと不安になる」、「すべての単語がわからないと不安になったり戸惑ったりする」、「英語学習で最も難しいのは『読む』ことである」の項目において統計的に有意な不安傾向の軽減が確認された。

学習者タイプ別の効果については、「読解不安が高く、読解力が高い学習者群」は、他群に比べ、FLRAS 全体の平均の変化が大きく、各項目の変化も最も多く見られた。また、「読解不安が高く、読解力が低い学習者群」は、FLRAS 全体の平均の変化が 2 番目に大きく、各項目についても、3 項目で統計的な有意差が確認できたことから、読解不安が高く、読解力が低い学習者にも、多読の効果が現れ易いことが示唆された。さらに、「読解不安が低く、読解力が高い学習者群」と「読解不安が低く、読解力が低い学習者群」を比較すると、「読解不安が低く、読解力が高い学習者群」は、FLRAS 全体の平均がプラスに変化しているが、「読解不安が低く、読解力が低い学習者群」は、若干ではあるが減少が見られた。各項目についても、「読解不安が低く、読解力が低い学習者群」には、統計的に有意な変化が 2 項目で見られ、有意差はないが、大きな変化があった項目も多い。よって、読解不安が同じように低い傾向にある場合、読解力が高い学習者より、低い学習者の方が、多読の影響を受けやすいことが示唆された。

学習者タイプによる多読の傾向については、読語数の平均が、(a)読解不安が低く、読解力が低い学習者群、(b)読解不安が低く、読解力が高い学習者群、(c)読解不安が高く、読解力が低い学習者群、(d)読解不安が高く、読解力が高い学習者群の順で多く、読解不安が低い学習者は、高い学習者よりも、より多く読む傾向が確認された。よって、読語数の多さと英語読解力の向上に正の相関があるとすれば、読解不安が低い学習者の方が、多読による英語読解力の向上が期待できることが示唆された。

(3)-2 全体的な傾向として、英語を使う仕事に就きたいという希望、知識や視野の拡大への意欲、英語圏の文化や習慣についての好奇心を有している学習者の読書量が多い傾向にあることが示唆された。加えて、教師による多読の読書量の目標の提示や教師の肯定的な声かけが読書量にプラスの影響を与えることが窺えた。さらに、質問紙の質問項目を因子分析にかけて分類し、質問項目から「実利」、「関係と自尊」、「図書と多読法」の 3 つの潜在因子を検出した。それぞれの因子が、どの程度多読読書量と因果関係があるのかを検証した結果、1・3 年生に対しては、授業内多読活動における教師や学習者間の関係性と自尊心が多読のパフォーマンス(読書量)に直接的な影響を及ぼす可能性があることが窺われた。教育的示唆という観点で移住の結果をまとめると、教師が授業を通して、学習者に対して、知識の獲得や視野の拡大に対する意欲の向上や英語圏の文化や習慣に対する興味の喚起を促すよう努めることと、目標となる読書語数を示し、多読の進捗状況に対して積極的に肯定的なフィードバックを与えるなどの支援を行なうことが、多読の読書量にプラスの影響を与えられるという示唆が得られた。さらに、初・中級英語学習者に対しては、学習者同士の結びつきを強め、学習者の自尊心を高めるような教師の支援が読書量にプラスの効果をもたらす可能性があるという示唆が得られたと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①種村俊介, 英語多読における読書量に影響を及ぼす要因の分析, 中部地区英語教育学会『紀要 40』, (2011), 9-16, (査読有)

②種村俊介, 高専における多読の実践報告—学習者の語彙に及ぼす影響の検証—, 第36回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集, (2010), 530-531, (査読無)

③種村俊介, 英語多読の実践と英語多読が学習者の語彙サイズに及ぼした影響について, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集第29号, (2010), 49-58, (査読有)

④種村俊介, 英語の多読が初級英語学習者の読解不安に与える影響について, 中部地区英語教育学会『紀要 39』, (2010), 141-148, (査読有)

〔学会発表〕（計４件）
①種村俊介, 高専における多読の実践報告—学習者の語彙に及ぼす影響の検証—, 第36回全国英語教育学会大阪研究大会, 2010年8月8日, 関西大学(大阪府)

②種村俊介, 多読による読書量と関係のある要因の分析, 第 40 回中部地区英語教育学会石川大会, 2010年6月26日, 石川県立大学(石川県)

③種村俊介, 英語多読の実践と英語多読が学習者の語彙サイズに及ぼした影響について, 全国高等専門学校英語教育学会第 33 回研究大会, 2009年 9月12日, 京都府中小企業会館(京都府)

④種村俊介, 英語の多読が初級英語学習者の読解不安に与える影響について, 第 39 回中部地区英語教育学会静岡大会, 常葉学園大学(静岡県)

６．研究組織
(1)研究代表者
種村俊介（TANEMURA SHUNSUME）
沼津工業高等専門学校・教養科・講師
研究者番号：70435428

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：